

三島通りから旅籠町までの幼きころの風景 その 1

市村 幸夫

(1) 三島通りはスキー場

わたしは旅籠町が下町風情の色濃くあった時代に生まれた。雪がつもれば師範学校から四小までの坂道は、一気に滑ってくることができるスキー場であった。自動車は黒い煙を吐く木炭のバスぐらいで、何の心配もなく滑ることができた。女の子は雪下駄。男どもは竹べらかスキー。旧県庁前から片岡石屋の四辻までは子ども天国であった。私の親父は指物大工であり、箱櫓を作ってくれた。前には長靴を入れるところがあり、丸い火鉢を入れ弟たちを乗せ、師範学校前からのスタートが休日の日課になっていた。

栄町と結ぶ旅籠町の大通りは町の改造で様子を一変した。道幅は広くなり、木炭バスのバンパーにぶら下がって、竹スキーを滑べらせた昔日は、もう戻って来ない。

吉野屋薬局の四つ辻の西側に日下部という草履屋さんがあり、いつも店の片隅で遊んでいた。指物師であった父親の影響か、職人の手仕事を眺めているのが好きであったようだ。草履屋のおばちゃんは「三軒隣の指物職人の四人兄弟の長男で、通りを眺めているのが好きなのか、いつもここで……」と説明するのが面倒になったとみえて「んだ、おらえの孫、めんこいべ」と客に説明し出したので、小学校に入るまで「草履屋の孫」で過ごすことになった。

店のまえには防火用水の桶があり、縁を叩けば浮き沈みするボウフラが可愛いと思っていた。天敵の蚊に成長することなど思いもしなかった。夏、コウモリが飛び交っていた。陽が落ちると向かいの飯野材木店の前の電線にいつもコウモリが勢ぞろいする。網を片手に挑戦したが、捕まえられるほどあまくはなかった。ねぐらはどこであったものか。なぜこの電線だけが彼らの常宿だったのか今もってふしぎなことである。

(2) 裁判所前の堰での魚捕り

山形市内には五つの堰が流れている。馬見ヶ崎川から取り入れた水は、川下まで幾つかのドラマを演じながら流れていく。川上と川下の堰とでは違った顔を見せている。川上では粉挽きの水車が廻っていた。水車はハッタラ或いはバッタラと称していた。川下は江俣・陣場・陣場新田・内表・吉野宿・鮎洗・中野・船町の八ヶ村